鎌倉の明応津波～大仏殿は流されたのか？

萬年　一剛（神奈川県温泉地学研究所）

はじめに

世界遺産に名乗りを上げている古都鎌倉を代表する観光スポットのひとつに、有名な高徳院の大仏があります。この大仏、奈良の大仏と違って露天、雨ざらしですが、その昔は大仏殿があったとされます。たしかに、大仏の周りにはその礎石といわれる大きな石が幾つかあります（写真１）。

昔あった大仏殿がどうして今は無いのか？それは津波によって流されたからだという言い伝えがあります。昨年発表された神奈川県の津波浸水予測図も、そうした言い伝えを考慮に入れて、大仏殿に到達するような津波をコンピュータで作り出して計算させたものです。

ところが、大仏殿が津波で流されたという説は、歴史のプロの間では「俗説」として片づけられています。どうしてそうなっているのでしょうか。また「俗説」は根も葉もない話に過ぎないのでしょうか？本稿では、大仏殿を流したとされる明応の津波について、歴史地震研究がたどってきたこれまでの紆余曲折と最近の動向についてご紹介します。

写真１　鎌倉高徳院の大仏。手前に見える平たい石が大仏殿の礎石と言われる石。

鎌倉大日記

大仏殿と津波の関係について記述した文献は幾つかありますが、ここでは最も重要な文献を一つだけ取り上げて検討してみます。それは、「鎌倉大日記」です。

鎌倉大日記は、誰かの日記のような名前の文献ですが、基本的には年表の類で、治承四 (1180) 年から天文八 (1539) 年に、主に東国で起きた事件を記した書物です。南北朝時代の頃から書き継がれてきたと考えられていますが、執筆の経緯や著者は不明、原本も残っていません。明応の津波について取り扱っている書物はこのほかにいくつかありますが、ごく最近まで江戸時代の文献しか知られてきませんでした（山本、1989）。

江戸時代の文献と言うことは、明応の津波について著者が体験したり、体験した人の話を聞いたと言うことはあり得ません。つまり、「また聞き」、あるいは「伝言ゲーム」の繰り返しの結果記されたということになり、信頼度ではワンランクダウンです。それに実際のところ、そうした江戸時代の文献も、鎌倉大日記より詳しい記録がされているというわけでも無いのです。ですから、鎌倉大日記くらいしか、検討に値する文献が無いのです。

さて、鎌倉大日記にある明応津波の記述は以下の通りです。

「明応四乙卯八月十五日、大地震、洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余」。

これを現代語に訳すと、「明応四年八月十五日（1495 年 9 月 3 日）、

大地震と洪水があった。鎌倉由比ヶ浜の海水が千度壇に至った。水の勢いが大仏殿の堂舎屋を破った。溺死人は二百名あまりを数えた」という風になります。洪水となっていますが、同じ日に地震と洪水が起きたと言うより、地震とそれに続いて津波が発生したと読むのが素直である、と言うことは異存無いでしょう。

この記述は、「大仏殿が津波で流された」という説の根拠になっていますが、よく読むと津波が大仏殿を流したと明確に書いているわけではありません。しかし、大仏殿に津波が達して、被害を受けたと読もうと思えば読める、なかなか微妙なところであります。

一方、江戸時代の文献である「続本朝通鑑」など複数の文献では「大仏殿破壊」と明記されています。したがって、どういう経緯かわかりませんが、江戸時代には大仏殿が津波で流されたとする「俗説」がはびこっていたと言うことはわかります。でも、繰り返しになりますが鎌倉大日記は、大仏殿が津波で流されたと解釈するには微妙なニュアンスです（鎌倉の地図は図 1 を参照下さい）。

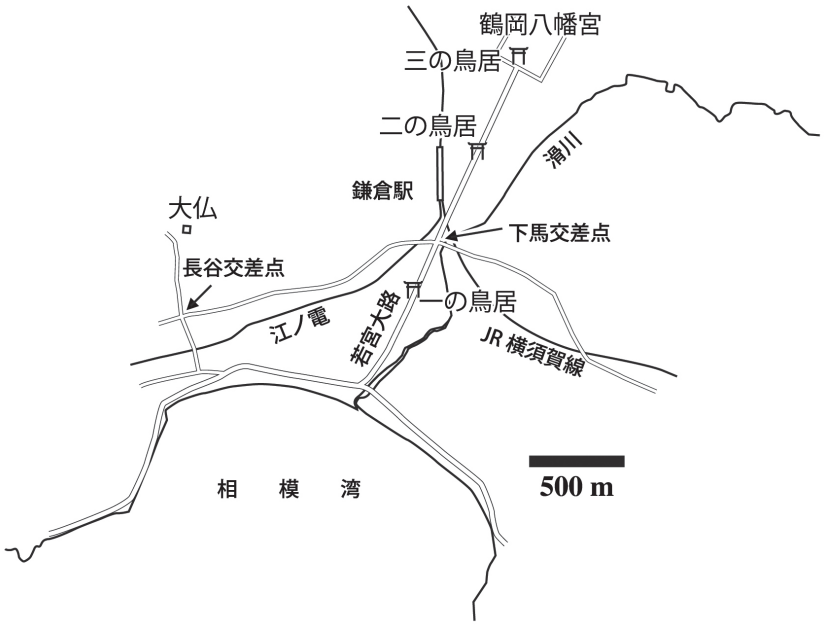

図 1　鎌倉の地図

大仏殿は津波で流されたのか？

実際、鎌倉大日記のこの記述について大仏殿が流されたという読み方をするプロ、つまり歴史学者や、歴史地震に詳しい地震学者はほとんどいないのです。むしろかなり自信を持って大仏殿が津波に流されたというのを「俗説」として退けているのです。なぜかというと、鎌倉大日記が津波発生日としている明応四年八月十五日の前に、大仏殿はすでに無かったという文献があるからです。

その文献は万里集九が書いた「梅花無尽蔵」です。室町時代の禅僧である万里集九は東国を転々としましたが、その時に目にしたものや感慨を漢文で記した旅行記がこの本で、本人が編纂をして今に残っています。梅花無尽蔵は、鎌倉大日記に比べると書かれた時期や著者がはっきりしていて、歴史のプロは梅花無尽蔵の方が鎌倉大日記より信頼性があるだろうと考えているのです。

それでは、皆さんも実際に読んでみましょう。明応四年の 9 年前にあたる文明十八年十月二十四日（1486 年 11 月 20 日）、万里集九は大仏をおとずれて、梅花無尽蔵にこう記しています。

「遂見長谷観音之古道場、相去数百歩、而両山之間、逢銅大仏仏長七八丈、腹中空洞、応容数百人背後有穴、脱鞋入腹、僉云、此中往々博奕者白昼呼五白之処也。無堂宇而露坐突兀」。

この内容を現代語に訳すと、「長谷観音の古い道場を見て、数百歩行くと、二つの山の間にある銅で出来た大仏に逢う。高さは 7 ～ 8 丈。腹の中は空洞であり、数百人は入れる。後ろに穴があって、わらじを脱いで腹の中に入る。みんなが言うことには、この中に往々にして、ばくち打ちが昼日中からいて、サイコロをふっているという。お堂は無くて、露座である」と言ったところでしょうか。

大仏の胎内でばくちに興じたら、エコーが効いてさぞ盛り上がったことだろうなどと想像してしまい、私は笑っちゃったのですが、それはともかく、梅花無尽蔵の記述の注目点は、この時代、大仏は見る影も無くさびれていて、お堂も無いような状態であった、ということでしょう。梅花無尽蔵のおかげで、1486 年 11 月 20 日の、大仏殿無き大仏を、我々は安心して鮮やかにイメージできますね。これが梅花無尽蔵のもつ圧倒的な信頼性なわけです。

そういうわけで、プロの間ではこれで勝負あった、つまり鎌倉大日記の記述を大仏殿が流されたと読むのは間違えですよ、というのが通説になっているのです。じつは、当の鎌倉大日記も、応安二 (1369) 年の記述として「大仏殿転倒」、としているのです。1369 年と言えば、鎌倉

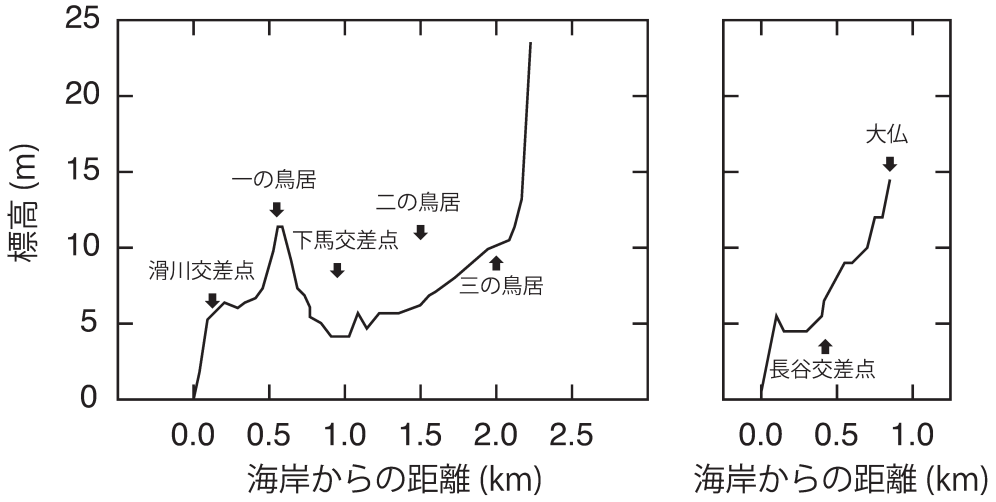

図 2 （左）海岸から鶴岡八幡宮まで、（右）海岸から大仏までの地形断面図。国土地理院が発行する基盤地図情報 5m メッシュのデータから作成。

幕府はとっくに滅びていて、鎌倉は武士の首都では無くなっていました。そこから、1495 年までに大仏殿を建て直した。その可能性はゼロではないです。実際、再建に関する記述はいっさい伝えられていませんから、想像は自由です。でも常識的に考えて、だれが大仏殿のような多額の予算がかかる工事をするというのでしょうか。そう考えると、大仏殿の再建はありえないでしょう。

ですから、鎌倉大日記にある「大仏殿破堂舎屋」は、津波が大仏殿を壊したのでは無く、大仏殿と関係した建物を壊したと読むのがせいぜいだろうと歴史地震の専門家は考えます。そもそも、津波が大仏殿に到達するというのは非常に考えにくいのです。なぜなら現在の大仏がある地点の標高は 14m ほどあるので、もしこの高さで津波が来たら鶴岡八幡宮の前も津波で浸水していなくてはいけないのです（図 2）。要するに鎌倉市街は大半が浸水してしまい、そうであれば「鎌倉大日記」の記述もそれなりのものになるはずです。

一般には「大仏殿が津波で流された」という説がとても普及してしまっているのですが、そういうわけで歴史地震学者の方々は、この説を「俗説」として片づけていて基本的に相手にしていません。それどころか、鎌倉大日記そのものの信頼性について疑問符をつけてきたのです。

無視されてきた鎌倉大日記

日本ではこれまで、歴史上の地震や津波をまとめたカタログが何冊か出版されてきましたが、最近のカタログでは、鎌倉を襲った明応津波の日付さえも、鎌倉大日記のものは採用されていないのです。その経緯は次のとおりです。

鎌倉大日記の明応津波の日付は先に述べたとおり、明応四年八月十五日です。実は、これに近い明応七年八月二十五日（1498 年 9 月 11 日）に熊野灘付近の南海トラフで発生した地震があり、浜名湖が外海とつながるなど東海道一帯に大きな影響と被害があったのですが、1980 年代に、鎌倉大日記の日付はこの南海トラフ地震の日付の誤記と片づけられてしまったのです。それどころか、この誤記説をもとに、熊野灘の津波が伊豆半島の東側にある鎌倉で大きな被害を及ぼすのは考えにくいということで、津波の記述にさえ疑問が呈されるようになりました。鎌倉大日記、踏んだり蹴ったりというのが、かれこれここ 20 年間の状態だったのです。

ところが、ごく最近になって伊東市教育委員会の金子浩之さんの研究によって、明応四年の地震は、明応七年の南海トラフの地震とは別に確かに存在し、しかも南関東に甚大な被害を与えたかもしれないということが明らかになりつつあります。詳しくは、金子（2011）をご覧頂きたいのですが、金子さんの研究の要点は以下の通りです。

一番重要なのは、明応四年の鎌倉での地震について書いた文献を、鎌倉大日記以外に探し出したという点です。決定的なのは、「熊野年代記」という熊野三山の社家が記した記録で、これには明応七年の南海トラフ地震について詳しい記述があることに加え、「明応四年八月十五日乙卯、鎌倉大地震」という記述があります。ようするに、明応七年と別個に、明応四年に鎌倉で大地震があったことが明らかになったわけです。

また、静岡県伊東市にある宇佐美遺跡では標高 7.8m のところに、津波堆積物がみつかりました。この津波堆積物は考古学的な検討から 15

世紀と考えられています。明応四（1495）年に発生した津波の堆積物である、と断定できるまで分解能があるわけでは無いですが、宇佐美で高さ 7.8m を越える大きい津波が 15 世紀に発生した、その場合候補は明応四年しかないので、そう考えた方が良いだろうということです。

宇佐美は伊豆半島の東岸なので津波を引き起こした地震は南海トラフでは無く伊豆半島より東側の海域、つまり相模灘で発生した、と考えるのが妥当でしょう。ちなみに、宇佐美での津波高は大正関東地震で４～７m 程度とされていますから、標高 7.8m のところに津波堆積物というのは、大正関東に比べてかなり大きい津波と言うことになります。

このように、金子さんの研究によって、踏んだり蹴ったりだった鎌倉大日記の名誉が少し回復されつつある、これが私の見立てであります。ちなみに、明応四（1495）年は、温泉地学研究所のある小田原市にとっては記念すべき年号です。なぜかといえば、この年の九月に北条早雲が小田原に入城したからです。金子さんは、明応鎌倉津波と小田原入城が日付的に近接していることから、早雲は津波で壊滅した小田原を奪取したのでは無いかと考えています（写真２）。また、早雲は明応七年に伊豆半島を征服していますが、これを明応南海トラフ地震の被災地に乗り込んで、やはり易々と奪取した結果では無いかと考えています。どうでしょうか？　ワクワクする論文でしょう？

写真２　小田原駅前の北条早雲像。騎馬の早雲の周りに居る動物は、小田原攻めに用いられた有名な計略「火牛の計」の牛。金子説によれば、じつは火牛は本物の牛では無く、小田原に侵入した津波という魔物のことではないかと言う。

鎌倉大日記～その他の記述

さて、鎌倉大日記の名誉が回復されたところで、明応四年津波で被った鎌倉の被害はどういったものだったのか、再検討していきましょう。鎌倉大日記の記録のポイントは４つしかありません。すなわち、津波発生日（1495 年９月３日）と２つの津波遡上地点（水勢大仏殿破堂舎屋と千度壇）、そして死者 200 名余という被害状況です。このうち、発生時期と大仏殿については先に述べましたので、残り２つです。これらを、ほかの文献や史実と一緒にゆっくりと考えてみましょう。

千度壇　鎌倉大日記にある「海水、到千度壇」の「千度壇」は津波の遡上地点を示しているので、津波の大きさを知る非常に大きな手がかりですが、そう言う地名は現代の鎌倉に見当たりません。千度壇とはどこを指すのでしょうか？

梅花無尽蔵によれば、万里集九は大仏を見た後、浜に立つ鳥居に行きました。この鳥居は大きいもので、柱は３人が手を広げて囲むほどの太さがありました。そこでカラスとカモメが魚をめぐって空中戦を展開しているのを眺め、生きとし生けるものは争いが絶えないのだな、というような感慨を述べています。さすがはお坊さん、哲学的な感慨です。そして千度小路を通って鶴岡八幡宮を参拝します。この記述から、千度小路は、今も浜と八幡宮を結ぶ若宮大路を指すことがわかります。

さらにしばらく読み進めると、この旅路を詠った漢詩にあたります。そこには、「千度壇、連七里濱」（千度の壇、七里ヶ浜に連なる）とあり、鎌倉大日記で呼ばれていた「千度壇」が、千度小路、つまり若宮大路であるということが確認できます。「千度壇」の壇は今もある段葛のことだとされています。段葛は、いまは二の鳥居までしかありませんが、万里集九の昔は由比ヶ浜にあった鳥居まで続いたと、素人の私には読めます。そう考えると「到千度壇」と言っても若宮大路のどこに津波が到達したのか、という問題にぶち当たります。

現在の若宮大路は結構アップダウンのある通りで、鶴岡八幡宮前の交差点にある三の鳥居で約 10m、徐々に下がって二の鳥居で約 6m、下馬の交差点で約 4m になった後、じりじりあがって一の鳥居で約 11m、その後わずかに下がって滑川交差点で約 5m の標高があります（図 2）。

山本 (1989) は、いくつかの文献をもとに、段葛、つまり千度壇が当時下馬交差点より南側にはなかったという主張をして、「到千度壇」は下馬交差点付近が浸水したことを表現しているのだろうと考えました。下馬交差点は、滑川に近く、滑川を遡上した津波が交差点にあふれ出ることは十分あり得ます。実際、元禄関東地震の津波では、滑川を遡上して下馬に進入した津波が二の鳥居まで遡上したと考えられています。羽鳥（1991）は、これらのことを考慮して、明応の津波は元禄の津波より小さく、大正の津波と同程度と考えました。

しかし、鎌倉大日記の記述から、津波の遡上高を下馬に限定するのは危険であると思います。万里集九は「千度壇、連七里濱」と言っており、たとえ、段葛のような段が下馬交差点までしか無かったとしても、海岸近くまで今の若宮大路が千度壇と呼ばれていた可能性があることは明らかです。ですから、私は鎌倉大日記の「到千度壇」を、浜の鳥居に津波が遡上した、と解釈してもそんなに変ではないと思います。

死者 200 余名　鎌倉の歴史津波被害を研究する上でいつも問題となるのは、死者の数がよくわからないという点です。たとえば、大正関東地震で鎌倉町内の死者数は 497 名とされています。当時の鎌倉町の人口は 17600 名弱、世帯数は 3700 弱でした。このうち、津波による死者は何名かというのはよくわかっていません。地震による被害が非常に大きく、その後すぐに津波に襲われたので、津波の死者だけを取り上げてカウントすることが難しすぎたためです。一応、当時の統計では「流失・埋没」、つまり津波などによって流されたり、土砂崩れによって生き埋めになった数を挙げる項目があり、死者 89 名が記録されています。

一方、鎌倉大日記の方は「溺死人二百余」と、死因を津波に特定して具体的な数を挙げているのが興味深い点です。また、200 名とは大正関東に比べても結構な被害と言えます。もちろん、死者の数を単純に比較することで、津波の規模を推定することは出来ません。なぜなら明応期の鎌倉で、どこにどれくらいの人が住んでいたのかさえわからないからです。でも、鎌倉大日記が津波に限っての死者数を書き残しており、その数が結構多いということを頭の片隅に入れておいていいでしょう。

将来の課題

鎌倉大日記の記述は「到千度壇」と「水勢大仏殿破堂舎屋」が両立しない、これが最大の問題です。このため、鎌倉における明応津波のイメージがクリアにならないのです。だからといって文献の信頼性がないかと言うとそんな事はなかった、これは見てきたとおりです。ですから、「到千度壇」と「水勢大仏殿破堂舎屋」が両立しない問題も、両立しないからどちらかを取って片方を無視する、と言う考え方では無く、今後とも出来るだけ両立する可能性を考慮した方が、私は良いと思います。

たとえば、当時、大仏殿に関連する施設が長谷の交差点あたりまで伸びていたら、大きな津波で流された可能性が生じてきます。おそらく、海岸で 8 ～ 9m ほどあればそのようになりますが、浜の大鳥居がそのくらいの標高に立っていたとすれば、「到千度壇」と「水勢大仏殿破堂舎屋」が両立することになります。私はそういうわけで、考古学的な調査や地形発達史の研究が進展することによって、将来鎌倉大日記の記述についてより納得のいく解釈が可能になるかも知れないと思っていますが、皆さんはどうお考えでしょうか。

引用文献

金子浩之（2011）宇佐美遺跡検出の津波堆積物と明応四年地震・津波の再評価、伊東市史研究 no.10, 102-124.

山本武夫（1989）明応七年（一四九八）の海洋地震―伊豆以東における初状況、荻原尊禮編　続古地震　古今書院.

羽鳥徳太郎 (1991) 鎌倉における明応（1498）・元禄（1703）・大正（1923）津波の浸水域、歴史地震 , 7, 1-10.